

# 山吹の池

精

樹

雨あがりの小徑はいやに迂る。路の雨側にすく／＼と立ち並んでる椎や檜の古木は枝一面に葉を茂らせて出来るだけ天と地とを没交渉にせんとして居るかのやうで、空は晴れてるのかまだ曇つてるのか薩張わからぬ。幹には青い苔が生れたのが多くて、さつきの雨でしつ／＼と潤うて居る。私はゆで蛸子の足のやうに路へおさばり出た樹の根をじめ／＼する草鞋に踏み越えながら登つて行く。時々足音にびつ／＼してキタと變な聲をして枝をゆすつて露の雨をおびせて飛びさる小鳥の外は何も聲らしいものも聞かない。廣い世の中に自分一人しか居ない様な考がふと起つて来る。タイムといふ觀念は頭から逃げて終つて、着てる衣物さへ――この文明人の造つた衣物さへ脱ぎ捨てたなら、今にも太古の世の人間になりそうである。

猛獸と戦つてその日／＼の腹を肥やして行くことしか知らなかつた時代には、人の心は何んなにか男性的であつたらう、どんなにか單純であつたらう、斧を研いで針となすもタイムの力である、腹の人を頭の人となすのもタイムの力である、思へばタイムの力は恐ろしいものはない。タイムが人間の頭を鋭敏にし人間の數を多くした結果が弱い者の苦痛となり更に甚しいのは狂となる――

しかし自分はこんな殘酷な考へを如何しても眞とするに忍びない、小さい時から母代はうに多つて育て、呉れた人の上にこんな考は及ぼしたくない。だけれど叔母は實際身体も意志も人並外れて弱かつた、文明の世の中にて如何しても自己の存在を安全に主張し得る火ではなかつたのだ。



「他愛もなく笑つた。大變機嫌が良い様子である。婆やは氣の毒そうな顔をして、『まあ奥様、た太りになつてたよろしいではありませんか。立派にた成んなすつて私なんか如何なにか嬉しう思ひますに』」

と言つて、私の方を向ひて、昨日からもう来る頃だと言つて大層楽しんで待つてゐらしたと告げた。その爲か狂人とは思へぬ程愉快そうである、私は草鞋をぬいで足を洗つて、やがて臺所火鉢の側に坐つた。叔母は向ふ側に坐る。

「これ好きなカステローラを持つて來ましたよ」  
「お好みなカステローラを持つて來ましたよ」  
「お好みなカステローラを持つて來ましたよ」  
「お好みなカステローラを持つて來ましたよ」

「お氣がついたね、澤山なこと、婆や庖丁と箸を持つてた出で、た開きして見やうから。源さん山の中で御馳走はないよ」

「お婆やが持つて出た膳に向ふ私に言つた。」

これでは一向違つてる所もないと思つて、ひそかに喜びながら話してると、語の筋は次第に變になる。しまひには庭の隅に毎晩た父さんが鼻になつて出て來るとか、泉水の底の方から誰か知らん始終遊びに來い々々と言ふとか、まるで取りどめの無い話になつてしまつた。

鹽の土手は一度解け始めたら永劫もとには歸されないと云ふが、理性を失つた叔母は正にそれである。汽船の臭氣にむかつく人は下りねばその苦痛は癒るまい。人世そのものに目まひをした叔母は死なねば醒むる時期はないのである。

私に晩飯をしまつてゐる間に叔母はカステーラを婆やにもやり、自分も旨そうに食べて居たが、やがてふいふ立つて箱を戸棚にしまつて、裏庭へ出て行つた。日頃から瘡せ性の叔母は發狂以來年々に瘡せ細つて一人の衰を催さしめる。幼い昔こゝに三年ばかり叔母の手で育てられた頃の事は、私の一生の中で最も懐しい思ひ出の種であるのに變れば變るものだと思ひながら襖楊子をくはへて裏へ出た。叔母は何處へ行つたか居ない。十三日位の月が松や椎の間を渡れて庭一杯に美妙的な影を織り出して居る。拵々さつと吹いて來る微風に蔭れる木の葉の影はちらちらと動いて地をた一面に金魚か泳いで居るかのやう。庭の隅には池をまはつて山吹が今真盛りに咲いて居る。私の歩みはたのづこの方へ運ばれた。池は叔母が正氣であつた頃は金魚や緋鯉が澤山生けてあつて叔母はよく萩の咲く頃虫籠を吊つて、風流な叔父かゝつた前も中々話せるわいさ褒められて居たし、また小さな私の手を取つて秋の月をあびながら池をめぐつて、よく色々と品の變つたた伽嘶をして呉れたのである。が今はもう池も大分荒れてしまい、庭には草が茂つて秋ならば虫の音が雨のやうに降つて來さうである。只笥の水のちよろ／＼いふ音のみが昔と少しも變りなく心地よく響く。

「源さん」  
と聲が松の蔭から聞えて叔母は髪をさらりと後に垂れて出て來た。

「叔母さん如何したんです、髪なんか解いて」

叔母は何とも答へずにとろつと池の方へ歩いて來る。そして月明りを斜に受けて池の水際に立つた、その瞬間の叔母の顔、私は如何にも血の通つた此の世の顔とは思ひかねた。肉の稍々てけた白い顔に月の光は

うす青くさして、眼はじつと森の方を見やうたま々で動かない。宛然たる大理石像である。嗚呼叔母は如何しても現世の人ではない、別の世界の魂が誤つて此の地球にさまよい出たのではなからうか。まだ正氣の時に、

「私はこの世にたつた一人ですわ」

と言つて變な事をいふ人だと皆から笑はれたそうだが、男一人女一人の同胞でしかも両親に早く別れた叔母は、廣い世界を砂漠を行くやうな心地で渡つて居たのであろう。

山吹の花は微風にほろ／＼と散つて池に浮ぶ、叔母の眼はそれに移つた。とその瞬間私の頭は嘗て見たミレーのオフキリアを思ひ浮べた。小さな白い花が咲きこぼれて居る下を、苦みもなげに流れて居るあの死顔、あれを見ると私は狂人の心の安らけさを感じずには居られない。今の叔母は丁度あれだ、心もなげれば考へもなからう。只私にミレーの筆のないのを憾みとする。叔母の眼は水から一向に動かない。

「叔母さん、まだ金魚は居ますか」

「さうさね、金魚を飼つたこともあつたね」

五月の風も山里には寒い、私は襟を合せて懷手をした。叔母はやはり動かない。もうは入らうと促すと叔母は顔をあげて寂しげに笑つて口を開いた。がその聲は潤んで居た。山「源さん、私はほんとの私に會ひたい。こんなつまらないうその私は死んだつて好いから。ほんとの私に會ひたい」

とこれだけ言つて後は何か口の内で獨り語を早口にしゃべつて居る。神經が俄に興奮して來たのであらう。山吹の散つてるのを急に池の中に蹴込み始めた。夜が更けて池の真中に寫つて居た月は蹴込まれた花片のために割り裂かれて、金色の波が四方にゆれる。下駄の動く拍子に前に出る叔母の足は凄いやうに白い。

「この池の底から遊びにた出で〜と誘ふ聲が如何しても私のほんとの聲のやうでたまらない。私は如何かしてそこへ行きたぐつてね……」

「叔母さん、そんな筈はありません、それは此方の考へ一つでは随分笹の葉の鳴るのも赤兒の泣聲に聞えたりしますから、氣をしっかりとらなさい、こんな事はある筈でないと思つてると決してそんな變な所に聲が聞えたりするのですが……」

「そうだがね、私も始はそう思つてたけれど何度も何度も懐しい聲で呼ぶものだからね。この池の底を掘らせたらいけないだらうか……」

「随分深いから一寸掘れもしますまいし、掘つた所で何もありませんよ、それよりかそんな筈はないと定める氣にならなさい……」

と力ある聲に言ひ放つと、

「さうかね」と言つてほつと大きな息をついた。私は短い自分の影を見ても一度叔母に歸りを促そうと思ふと、「奥様、もうねは入りなさいまし、坊さまも眠いでせう」と、突然婆やが出て來たので、叔母も急に氣が變つて……

「源さん、ゆつくりたやすみよ、たといよれ月様だこと」  
と今氣ついたので殊更に月を褒めて叔母は歩を起した。

### 三

世の中に何が可愛相だといつて天刑病者と精神病者位哀れなものはない。然かもごちらも目のあたりその異様な容貌や風采を見せられては誰か之に對して同情を寄する元氣が出やう。まづ起るのは前者に對しては嫌惡、後者に對しては憫笑である。翻つて彼等を憐み同情すべき性情を呼び起す時は既に彼等の後姿を見送る時である。當に溫き同情すら面と對つては與ふるを惜まるゝ彼等は誠に人生最大の不幸者ではないか。彼等は生存の難有味は一生知らずに冷き土を被らねばならぬ。やさしい心を持つた一女性を何たる運命の風の吹きまはしてこの最大不幸者には入れたのであらうか、天の配劑は想像以上に奇である。時計がチーンと一時を打つ、開けつばなしの西の窓から月がさし込むで居る。耳を立てて見たが何一つ聞えるものもない。

叔母は寝ついたか隣りの部屋はひっそりして居る。叔母は肉体こそあるが心は叔父の死と共に七年の昔幽冥世界のものとなつてしまつたのである。「只一人」の人が頼みにした夫は結婚後一年の短日月を以て死んだ。この死の恐怖、頼るべき人の失はれた事が心弱き叔母の悲しき日を誘ふ緒となつたに違ひない、今年三十五の叔母はこれから先きの永い月日を、やはりこの様子で送るのであらうか。

明日立つ事を告げたら嘸本意ながるだらう。しかし遊んでる目もないからには止むを得ない事である。かめでもの慰みは婆やである、昔氣質でよく仕へて呉れるの下たのもしい、彼はうら若い叔母を御隠居様なら

か老人のいた名には、さうしても呼べないと言つて面相變らず奥様で通して居る。その運命を眺む者も、平和な山里にも悲惨な運命は時として来る、そしてこの運命の槍玉に上げられた者の内で、有形的に殺されたものよりも無形的に殺されたものの状態は一層悲惨である。

か考へながらうとうととどろけるやうに眼つてしまつた。日暮り、

四

眼をさますと障子翳明るゝなるて居る。叔母はもう疾々に起きて婆やと話して居る様子である。

「婆や今日は何かたいしい物をして源さんに食はせてたやうよ。た前の智慧のあるだけしぼつてね」

「たね、奥様。今朝は口が大變に軽いやうですわね。坊さまはよくた寝つて居らつしやること」

「さうだね、大分よたびれたがうらうら、山路ばかりだから、此度坊が歸るときには私も町へ出て見やうと田

家のし

これには婆やも困つて黙つてゐらしい、止めれば機嫌を損ねるだらうし、た出来な事を言つたら後で

變だからさうさう氣轉を聞かして外の話にしてしまつた様子。

「あち奥様さうなまつたのです」

といふ婆やの聲について、

「さうつてた前あち死人の顔見たいな色もた皿は見てるとぞつとするよ」

と調子荒く言ひ放つた。



私は起きて寤めやうと思つて蒲團から手を二本出してうんざりな寝ながら伸びをした。

着物を着かへて障子を開けるとじとじと雨が降つてゐる。遠くの山は煙つて近い木立との取合せが唐めいた景色に見ゆる。雨は細まかなる。猫毛を吹いたる如くで降つてるといふ心地は殆どしない。椽からぞく駒下駄を引つ掛けを庭へ下りた。山吹の花は露重をうに四方に少しうなだれて居て、叔母の投げた皿の音が散らばつて居る。

「叔母さん、た早う、雨になりましたね」  
と臺所に向つて聲をかけると、障子がスツツと開いて叔母の青白い顔が顯れた。髪はやはり垂れて居る。

「お前その皿の片を棄ててくれ呉れよ、見ると身震ひがするから、ね」

と頼むやうに言つてホ、と笑つた。白い齒がちらちらと見わたる瞬間に私は何故だが知らず氷のやうな冷たさを感じた。感情が極端に高じると熱を通り越して物凄く冷たさとなる、叔母の心もそんな風ではなからうか。

私は片を拾つて見ぬない叢に棄てた。そしてほんやりして暫くは山又山の重なりに見入つた。山際はくつきり藍色に染まつて裾は白くばけて居る、そして低い山がまたその藍色の頂をばかしの中にはつきりと見せて立つて居る。丁度寝ばげたやうな姿に見ゆる。叔母も小止みの雨を幸にふらつと出て来て池の汀に立つた、私は何心なく池を見ると、黄色な滑かな水の面に、「只一人の人」の非現世的な細長い袴もわが少しうなだれて、一分の凄を帯びた眼がじつと見つめて寫つてゐる。山吹の花から落ちる雫に、水の面は時々輪を作つては影をちらちらとゆする。私は「ほんとうの私に會ひたか」と言つた昨夜の叔母を思ひ浮べて、底ひ知られぬ寤夢を味ふやうな氣がした。

叔母は笕の水で口をそそぎながら、

「お父さんはたつしやかい、もうそろ／＼白髪が出来かけたらうね」。叔母は思ひ切つて、

「お父さんも忙しくつてね、今度の夏休み頃でもないさ一寸暇が出来ぬでせう、でも今年は是非一度は来て見やうつて仰つたよ」

「どうかい、お前も一緒にた出でよ、あたしを今度お前の歸るとき連れて行かんかい」。叔母は困つた事を言ひ出した。先年連れて歸つたら町のやかましさに厭氣がさして明るく歸らうと言ひだして閉口した事がある、それにもう今度は足が續きそうにも見ぬ。私は今は路が大層悪いから又にならいと、無理に苦しい嘘をついて一時遁れに切り抜けた。叔母は強ひてさは言はなかつた。お前の歸りかたに朝飯の膳に坐ると叔母は戸棚を開けて皿に盛つた洗ひ米を取り出し掌にのせてこつ／＼噛み始める。私は一方ならぬ喫驚して留めやうとすると、婆やが急いで私にささやいで、もう一年以上續けてたいてゐるから言はぬが好からうと告げる。私もそんな久しい事なら今言つても駄目だと思つて差し控へた。飯の濟む頃、叔母さん今日は忙しくつて仕方がないから歸ります」

「思ひ切つて告げると、お前も。山姥にまはさるゝ四もつてさ。其の儘歸つてお前の歸りかたに山姥ももう歸るか、私をた迎へには何時來て呉れる、――私お兄さんからた前を貰つたから歸らなうてよ。好きはないかい。是非歸るつて、そんなら夏休みにすぐた出でね」。山姥はさう言ひながら、私をた送つた。私が婆やと話しでる間に叔母は父へ手紙を托すると言つて部屋に行つた。もうお前の歸りかたに、

叔母は一向部屋から出て来ない。婆やどの話ももう一時間近くなつた。あまり時間が立つと、天氣も變だし、先で困るからと思つて、用意をしてしまつてから奥へ立つた。襖を開けると叔母は小さな紫檀の机に倚もたり、何故もなく書もかけては止め書きかけてはやめ、もう七八校切り端が出来て居る。筆蹟はどれも見事だが文句は皆きれよくでまるで纏まつて居ない。私はその内に時候の挨拶だけ書いたので一寸治りがついたのであつたのでそれを取つて、これでよろしいと言つて叔母に見せた。叔母は物足らぬ顔して筆を措いた。門で別れる時に、

「叔母さん、さよなら、またすぐ来ますよ」

と言ふと、叔母はしをれて小聲に何かつぶやいた。

行く事二町にしてして雨がザトツと降つて來た。ふり返るともう家も見えない。

私は叔母さんの命がもう永くないやうな氣がしてならない、そしてそのときにはなきがらは山吹の池のあたりへ葬つて奇麗な石を立てたいものだと思つた。

## 「温　泉　ま　で」

天　行　生

八月の熱苦しむ夏を、山間の涼しい温泉に今年も暮さうと田川は一人博多から上り列車に乗つた。